

# 埴谷雄高『死霊』第二章

——首猛夫、他人の自同律——

—

埴谷雄高『死霊』の主人公三輪与志は寡黙で内向的な青年である。対して、腹違いの兄首猛夫は饒舌で行動的だ。三輪与志より科白が多いのはもちろん、登場する頁数も凌いでいるのではないか。二人を対照的に描くことで、主人公の担う作品の主題は明確になる。他の兄弟の中でも首猛夫は特に重要な人物だ。

第四章の初めの方で、津田康造が首猛夫に尋ねる、「貴方の本体は、何です?」。首猛夫はすかさず答える、「形而上学的不快ですよ」。これを聞いていた三輪与志が衝撃を受ける、「不快……。どうしてあの男はそれをきっぱりと叫びあげ得たのだろう?」。この「不快」が自同律の不快

東 典 幸

であることに、証明の必要は無からう。首猛夫と三輪与志はまったく対照的な人物であるが、自同律の不快を抱いている。この最も重要な一点を二人は共有しているのだ。

しかし、二人の不快は方向が逆である。まづ、三輪与志の場合を簡単に確認しておこう。何度も引用されてきた第二章の一節である。

それは一般的にいつて愚かしいことに違いなかったが、《俺は——》と呟きはじめた彼は、《——俺である》と呟きつづけることがどうしても出来なかったのである。敢えてそう呟くことは名状しがたい不快なのであった。誰からも離れた孤独のなかで、胸の裡にそう呟くことは何ら困難なことではない——そういくら自分に思い

きかせても、敢えて咳きつづけることは彼に不可能であった。

単純にこれだけ読めば、自分が自分であることについての不快である。逃れることのできない自分の自意識の問題だ。ただし、彼は第一章ですでに不快を述べており、その章も考慮に入れば、論理や物理の問題でもある。自分が自分である、ということは、AがAであるように論理的に当然であり、物理的にも当然である。第一章での岸杉夫との議論も踏まえれば、三輪与志の不快は、こうした論理法則や物理法則にまで及んでいる。<sup>(1)</sup>しかし、いまは本人の自意識だけを問題にしておく。

対して、首猛夫はどうか。第一章から考えよう。「形而上学的不快」とは言うものの、彼は三輪与志のようにその不快を自同律の問題として抽象化することはない。論理にも物理にも関心はほとんど無い。「僕の行動の原理は——この世に人間しかない、ということだ!」と叫ぶとおり、人間だけが問題だ。幽霊をめぐる三輪与志と岸杉夫の議論に首猛夫は割り込んでゆく。もちろん、幽霊の話題は人間のたとえ話である。その幽霊のような人間たちに首猛

夫は「自殺の勧告」をする、と言う。「死刑の宣告」と言ってもいい。死を突きつけるのが彼のやり方である。『埴谷雄高独白「死霊」の世界』で、埴谷雄高はこんなふうに語っている。<sup>(2)</sup>

死ぬときにどういふふうにお前は考えるかという、極限におけるお前の自己反省はどういふふうになるかということに対する一種のリトマス試験紙として死を置くというのを、首猛夫はやっているわけです。(略) 最高の人間の心理の判断は、「死刑!」と言って死を与えたときにどう考えるかということ、その人の人格の内容が分かるということです。人格というか、思索というものを持った全体の人間像ですね。

死と向き合うことがその本人の存在と向き合うことになる、というのはハイデガーを思わせる。さほど突飛な発想でもない。ドストエフスキーの有名な体験が念頭にあったかもしれない。ただ、これだけでは自同律の問題とはつながりにくい。第一章に戻ろう。

すでに死刑宣告について、いま触れたようなことを、首

猛夫は岸杉夫に語っている。幽霊問答が始まるのはそのしばらく後だ。なぜ幽霊に自殺勧告をするのか。首猛夫はすぐには答えず、一見関連が無さそうな別の問いを投げかける、「ここに絶世の美人がいて、それが幽霊となれば、やはり、絶世の美人たらざるを得ないでしょうね」。これに岸杉夫が「そう、まあ、そうでしょう」と自然に答えると、さらに首猛夫は問う、「千年経ったら、どうでしょう」。もちろん、千年後も美人に違いない、と岸杉夫は迷い無く答える。すると、首猛夫は次にアリストテレスを例に挙げる。美人の幽霊が千年後も同じならば、同様、アリストテレスの幽霊は、いま現われても、二千三百年前と変わらぬ同じ思想を語るであろう。問題はここである。そんな幽霊たちに向かって、首猛夫は「恥を知れ」と糾弾するのだ。自殺を勧告する理由はこれである。

僕が訊いているのは、二千三百年以前の……まあ、百年以前のも好いが、或る思索者の思想についてなんです。つまり——或る瞬間でびたりと機能をとめてしまった思想は、恥知らずでないかと訊いているんです。あつは、僕は検察官になって、あらゆる幽霊の……幽霊とし

ての誕生日を仮借なく取調べてみたい。何処か薄暗い部屋で幽霊とびたりと眼を見合わせた瞬間、ふむ、僕はいきなりあびせかけてやるさ——恥を知れ、とね。そして、首くくりの手伝いでもしてやる積りなんです。あらゆる幽霊が百年もの歳月を許されながら、幽霊たり得た瞬間から思惟も成長もやめてしまつて、新たな啓示も表わし得ずに、老いたる繰言のみ僕の前に展げるなんて、それこそ首くくりに価する屈辱だ！

自同律の問題がここに現われる。幽霊は自身に関して、美人は美人である、アリストテレスはアリストテレスである、という自同律を不快に思わず、永遠に受け入れてしまっているのだ。首猛夫はこれを崩したい。ここに三輪与志との違いがある。三輪与志が不快を感じているのは、自分が自分であるという、我が身の自同律である。しかし、首猛夫が闘争を挑んでいるのは、他者の自同律なのだ。これを聞いて、岸杉夫が、自殺せねばならぬのは「幽霊の責任ではなく、つまり——話しかける貴方自身の責任ではないでしょうかね」と問い返していることは記憶にとめておこう。

自殺勧告にせよ、死刑宣告にせよ、そこには懲罰の意味合いがある。しかし、すでに見たように、死と向き合うことに作者は意味を持たせていた。首猛夫にしても、自己の自同律に自足している人間をたんに殺して済ませたいわけではない。彼はテロリストではなく、革命家なのである。三輪与志が自同律を超えた新論理を模索しているのと同様、首猛夫は自同律を超えた新人類の誕生を目論んでいるはずだ。それは第二章の話題である。首猛夫をよく理解した津田康造の言葉を借りれば、「生か死かの二者撰一を前にした人間精神の恐るべき変革」だ。その前に、『死霊』における死について、もう少し第一章で読んでおきたい。

いまさら引用はしないが、作者が繰り返し予告したとおりなら、三輪与志は『死霊』の終わりに呼吸を止める。しかし、死の問題を三輪与志はあまり考えない。死は首猛夫と矢場徹吾、黒岩健吉、特に矢場徹吾の担当である。少くとも、そうなるはずだったのではないか。第一章にはその形跡がある。「或るビルディングの六階」で矢場徹吾と話したことを首猛夫が語る場面だ。内容はふたつあって、ひとつは死とは関係が無い。一応触れておくと、それは、「この窓の外が、引力のない真空の拡がりだとして、身を

投げたらどうなるでしょう？」である。物理法則に従えば、本文にあるとおり、「永遠に……或る一点に止っているだろう」が正解だろうが、「僕は動くよ」「動く……？何によってです？」「ふむ、つまり、僕自身の傾向と重みによって」と答えるのが、この二人である。物理に従わない、という同じことはすでに三輪与志と岸杉夫が議論している。岸杉夫が「こんな風に——私が貴方を押せばそちらへ動くといった風に、生きていたくないのでしょうか？」と問うて、三輪与志が「そうです」と答えるくだりだ。首猛夫、矢場徹吾、三輪与志の三兄弟はこの点で一致している。

ふたつめが短いながら重要である。矢場徹吾が言う、「この世が終る前に——物体が眼を見開く過程を、私は確かめてみたいんです」だ。『死霊』にたびたび現われる終末観である。第三章では、黒川健吉が「宇宙死滅」として語るものだ。そこには、「嘗て人間をその上に乗せていた広大な宇宙の怖ろしい、物言わぬ、ひきさかれた、忌まわしい反省」がある。「それは、自然の法則を超えるのです。論理を逸脱するのです」。詳しくは第七章を読む時を待つとして、いまは簡単に述べておこう。矢場や黒川の言う、

この世の終わり、宇宙の死滅の日は、人よりも自然の死を考えている。自然が死ぬ、とは、木が木でなくなり、川が川でなくなるのだ。つまり、木の自同律、川の自同律が崩れる。そのように、自然の法則を超え、論理を逸脱したそれら物体は、眼を見開く。特に、みづから物体と化して黙り込み、自同律の不快を味わいつくした矢場徹吾は口も開いて、反省を語り出すだろう。ちなみに、首猛夫は、第一章の矢場には論理の「飛躍」を感じ、第三章の黒川にも「決定的な飛躍」を感じる。だが、首猛夫は矢場と黒川の言っていることを理解できているのだ。死が自同律の崩れる特異点であることには、少くとも同意するはずである。この場面にはもうひとつ、注目しておきたい箇所がある。さきほどの矢場の発言が出る直前である。

僕は窓の外の深い闇を眺めつづけていた。下の街路から何とも知れぬ騒音が聞えていた。遠くの広告燈が忙しげに明滅していた。僕は、瞬間眼を閉じると、直ぐ見開いてみた。涯も知れず拡がった漆黒の闇が、この薄暗い部屋の窓際に佇んでいる小さな二人の人物を凝々と見据えているような気がしたんです。僕には、そのと

き、或る想念が非常に明瞭になってきた。若し自然がこんな風に眼を見開いて睨みつづけているとしたら、その前で——何を考え、何を行うべきだろうか、と。すると、矢場が不意にいった。つづ

「この世が終る前に——物体が眼を見開く過程を、私は確かめてみたいんです」

珍しく首猛夫が自然を気にしている。「この世に人間しかない」はずだが、そんな彼の世界観でも、自分を見つめる神のような視点の存在が意識される。しかし、第一章でこれを指摘する人物はいない。津田康造が必要とされるのである。第二章に進もう。

## 二

第二章の中心は首猛夫と津田康造の議論である。「宣戦布告にきましたよ」と、首猛夫が声をかけて始まる。「どうして私にです」と落ち着き払って問う津田康造に、首猛夫は答える、「貴方が極点だからです」「アジア的思考様式の極点だからです」。首猛夫自身が言うとおり、「アジア的思考様式」はマルクス主義の影響を思わせるが、むしろ、

逆である。『死霊』の目指すのは「存在の革命」であり、その前提となる認識は、埴谷雄高の言葉を借りれば、「マルクス主義と共産党というのは、社会だけ革命すればよいと思った。しかし、それでは駄目、それでは駄目だということがよく分かった」、である。マルクス主義との違いを明快に見せるための用語なのだ。それだけのことであり、アジア的な何かを糾弾するための語ではない。ただ、首猛夫の宣戦布告は存在そのものではなく、いまは思考に向けられている。

それは、つまり、大地に密着した農夫の思考です。まだ暗い夜明けからその夜更けまで動きつづける一人の農夫の思考を、貴方は一日中追いつづけてみたことがありでしょうか。一体、そこにあるのは何だろう？ ふむ、貴方は既にお解りな筈だ。そこには余計な、自身に抵抗するようなものなど何もありはしない。おお、何もありません。そこにあるのは——太陽と嵐と自身の手足を頑くなに信じて、見られた自然と間隙すきもなく一致する精神です。あつは「——」のゆるぎない思考だ！

大地や農夫、太陽、嵐はアジアの農業国からの連想だろう。この箇所以外で『死霊』の話題にはならない。首猛夫が言いたいのは、「自身に抵抗するようなものなど何もありません」という思考のあり方である。自分が自分であることに抵抗するような、要するに、自同律の不快が起る可能性がまったく無い思考である。「見られた自然と間隙もなく一致する精神」は、認識した現実をそのまま不満無く受け容れる精神である。当然、「——」という現実の論理法則を揺るがす、存在の革命を思うことも無い。

津田康造はそういう人物として造形されている、と見てよからう。津田康造が初めて登場する場面で、彼は「如何なる事態が発生しても驚かないのが彼の特徴であった」と評される。現実受容型だからそんな性格なのである。この場面で津田夫人が娘の恋患いについて、「なんて馬鹿げた子だろう」と言えば、彼は「恋患いは、大体昔から馬鹿げていることだよ」と答える。また、津田夫人が娘の婚約者について、何を考えこんでいるのかわからない、と言えば、彼は「それが青春時代の特徴だ」と答える。何であれ、それはそういうものだ、として受け容れてしまう。自分が自分である、という自同律を、彼が不快に感じるこ

は無かるう。

すでに述べたように、首猛夫は、自同律を受け容れてい  
るこのような他者を許せないのである。そんな津田康造に  
わざわざ彼は「馬鹿げた話」を「用意してきた」。それは  
ある裁判官の話だ。彼は「兇悪な被告」に対しては暴行罪  
の見事な判決を下す。しかし、電車内で目撃した「暴漢」  
に対してはなすすべが無い。ただ「膝頭のあたり」をガタ  
ガタさせるだけだった。そんな話をひとつ、首猛夫は披露  
して津田康造に言う、「その暴漢を捉えて見事な判決を下  
すのは、もはや威儀正しい裁判官の役目でないと、勿論、  
貴方は主張なさるんでしょうね」。裁判官は裁判官である、  
という自同律を受け容れれば、たしかにそう主張すること  
になるだろう。だが、そのような「自身をなにかしら納得  
させる唯一の気休め」を「ゆるぎなき生だと頑くなに確信  
していること」、それこそが首猛夫にとっては、「宣戦布告  
すべき他方の極点なんです」。本来なら、その裁判官に  
は、自分が裁判官である、裁判官にすぎない、という自同  
律の枠を越えることができるはずだし、そうしたい、とい  
う欲求もあることは、膝頭の震えを見れば明らかなのだ。  
自分がそんな裁判官なら、と首猛夫は続ける、「おお、僕

は見事な判決を下しますよ。死刑!」。この意味も、す  
でに述べたことから明らかだろう。しかし、この手が津田康  
造には通用しない。それは首猛夫にもわかつている、「其  
処にそうして――眉も動かさずにいる貴方は、自然そのも  
のごとく坐っているだけだ」。手強い相手なのである。

首猛夫は話題を「人類の運命」に転じる、「人類はいま  
如何なる段階に到達し得たか、ということですよ」。一見  
唐突のようで、しかし、主題まで変わったわけではない。  
津田康造個人にはいまのところ歯が立たない死刑宣告であ  
るが、人類全体の歴史において、現代は「死の時代」なの  
である。首猛夫は長広舌を振るうが、ここでは、二十世紀  
は「戦争と革命の時代」だから死の時代でもあるのだ、と  
簡単にまとめておく。各人が死刑を宣告される現代は「人  
間精神の変革」のきっかけを与えられた時代でもあるの  
だ。その論旨も、これまで整理してきた首猛夫の発言と合  
わせて理解できるだろう。こんな時代にあつて、首猛夫は  
死刑宣告を撒き散らす「死の使徒」たらんとするのだ。こ  
れが第二章の章題にもなった「死の理論」である。

対して、津田康造は、いかにも彼らしい解答を述べる。  
人間は各々の自同律の枠内に閉じこもっているのだから、

人類は変化しない。「段階」というものは存在しないことになる。彼が例に挙げたのは「アラビヤの文化」だ。それは王水に溶ける黄金のように消滅してしまい、受け継ぐ者は無かったのではないか。埴谷雄高はしばしば「精神のリレー」という言葉を使ったが、津田康造の人類史観では、人から人へと思想をつなぐ精神のリレーは不可能である。

つまり、津田康造は死んだ状態の歴史を語っている。首猛夫はそこに、自分と同じ死の使徒の匂いを嗅ぎ取った。興味深いのはここである。津田康造はこの共感を受け容れず、むしろ、「死からの飛躍」をふたつ津田康造は思うのだ。ひとつは「私が千年も万年も永生を保ち得る」だ。それはたんに死から飛躍でただでなく、永遠の自同律の完成でもあろう。さて、もうひとつが見逃せない。「生れたばかりの赤ん坊が万と叫び得る」ことである。合わせて、「新しい錬金術」も予感している。それは「石を麵麴に変え得るかも知れない」。まづ、『死霊』を読んだ誰もが、第四章で三輪与志が、赤ん坊の泣くのを「唯一の起動力」と呼んだことを想起するだろう。第四章を解説する埴谷雄高の言葉を借りれば、「赤ん坊というのは象徴的なことであつて、自同律の不快ですべてが泣いている、発生し

たものは、出現したものはすべてね<sup>(5)</sup>」。赤ん坊の泣き声は自同律の不快の表明であり、三輪与志は自同律の不快を唯一の起動力にして論理法則や物理法則を交換しようとしている。三輪与志の「唯一の起動力」と津田康造の「万」は同じではないか。「新しい錬金術」も、石を麵麴に変えるように物理法則を超えるのだから、両者の共通点を考えたくなる。もちろん、それは津田康造と首猛夫との共通点でもある。首猛夫も「まったく同じものだ」と言う。ただし、微妙な意味合いの違いがある。「万」は「すべて」であることだ。精神のリレーが不可能だとしても、生れたばかりの赤ん坊が「万」と叫ぶことができれば、すなわち、すべてを有しているのであれば、それを失わず育てばよいだけで、人類は変化せずともそのまま充分に完璧な人間を有するはずである。これは首猛夫の「死の理論」とは異なる。津田康造はそこに気づいているわけだ。

以上、津田康造は『死霊』四兄弟にもひけをとらぬ、『死霊』ならではの個性的な思想家である。しかし、埴谷雄高は津田康造の思考をさらに展開させるつもりは無かつたようだ。彼はあくまで首猛夫の対談者であり、首猛夫の思想の特質を引き出す役割を担っている。その例をもうひ



とつ挙げよう。それは首猛夫が「一人狼」であることだ。津田康造は首猛夫の計画を実行に移す際に必要になるはずの組織について問うが、あまり要領を得ない。もともと組織は存在しないからである。で、氣を持たせるそんなやり取りがしばらくあった後に、首猛夫はやっと明かす、「僕は一人狼なんですよ」。

この主題は第五章の「自分だけでおこなう革命」とも関連するだろう。基本はおそらく埴谷雄高にとつては政治論の問題だ。ただ、第四章で、津田康造は首猛夫に「貴方はどうして一人狼になったのです？」と尋ねており、そこでの首猛夫はこれを自同律の問題として答えている、「人間精神を或る枠へはめこんでしまうものは凡て革命家に倣いしないのですよ」。首猛夫は二人の例を挙げる。一人目は「質朴な老人」で、彼は会ったこともないある革命家を称賛するが、それはその革命家が党の「中央委員」だからだ。二人目は「少年」で、彼は首猛夫から「連絡係」と呼ばれて発奮する。「中央委員」も「連絡係」も「馬鹿げた裝飾」なのだ。人間精神をそうした「或る枠」へはめこむことを首猛夫は嫌悪する。それは、すでに述べた、「裁判官」という枠に自分をはめこむ裁判官に対する嫌悪感と同

じものだ。老人や少年は中央委員の名に服従し、彼らから連絡係に指名されることを誇りとする。それは「永遠の隷属」だ。革命が組織を必要とする限り、この事態は避けられない。それに気づいて以来、「僕は本来の一人狼に立ち戻ってしまったのです」と首猛夫は言う。

対して、津田康造にしてみれば、「より高いものへ隷属することが最高の悦び」であり、老人や少年は「偉大な人間精神に達し得る素質をもっている」ことになる。ただ、いまはこれ以上、津田康造の思考を探ることはせずにおく。彼自身の思想よりも、彼が首猛夫をどう見るかの方が、『死霊』にとって重要なのである。

### 三

津田康造の役割は首猛夫の思想を引き出すだけではない。首猛夫の批判者でもある。死の理論を聞き終えた津田康造は言う。「貴方が自身で気付いている以上に恐ろしい立場は——最後まで、あらゆるものの最後まで、貴方は見届けなければならないということです」。これはどういう意味だろう。津田康造は続けてこうも言う、「貴方は陰謀の遂行の過程で、貴方自身に忠実であれば必ず恐ろしい立

場を悟る筈です」。すでに第一章で、幽霊に自殺を勧告する話を聞いた岸杉夫が首猛夫に「貴方自身の責任」を問うていたことも思い出しておこう。他人の自同律を攻撃してきた首猛夫の矛先が彼自身に突き刺さる、そんな場面が『死霊』に用意されていたのではないか。第二章からはふたつの可能性が考えられる。

ひとつは、いづれ首猛夫は自分自身の自同律の扱いに窮する、という可能性である。自分自身に死刑を宣告する時が来るのではないか。「自身に忠実」である、は換言すれば「最も必然的な理論で自身を強く縛る」だろう。津田康造によれば、それは「例えば——疑うべからざる自身の死を、固く確信する」ことなのである。他人に死を突きつけることが、なぜ自身に死を突きつけることにもなるのか。第二章の読者にはまだわからない。未完に終わった『死霊』の最終第九章まで読んでもわからないかもしれない。ただ、この言葉に対し、「何か耐えがたいものをのみこむように、首猛夫は息をとめたまま相手を凝視めつづけた」とある。首猛夫は何事かを深刻に受け止めたのだ。しかし、彼は「何やらを自身に悟るとか貴方に予告」されたと言うだけで、予告を充分に理解したようには見えず、「だ

が、決して負けやしない」と強がるのが精一杯だから、首猛夫の劣勢は明らかである。ここで津田夫人が入室し、二人の議論の第一ラウンドは終わる。

しかし、首猛夫は津田夫人を相手に綿屑や日射病、質問の悪魔フラゲル・デーモンの小話をして、読者と津田康造を油断させながら体勢を整え直す。そして、満を持して、睨みの悪魔ブリック・デーモンを放つのだ。睨みの悪魔は、「そいつがはったと一睨みすると相手はぱったりその場に倒れ死んでしまう」という強力な魔力の持ち主である。この悪魔がある時、「安楽椅子のなかで書見中の男」を訪ね、いつものように「はったと睨んだ」ところが、その瞬間、死んでしまったのはこの悪魔だった。実は、「書見中の男」は悪魔自身だった。なぜなら、悪魔は鏡を見ていたからで、彼は彼自身を睨んでしまったのである。そんな寓話である。「安楽椅子のなかで書見中の男」が津田康造を指すのは言うまでもない。また、この男を訪ねた者が首猛夫以外にありえないことにも気づくべきだ。さて、津田康造の言うとおり、首猛夫が自分自身を見つめて自分の理論に則って自身の自同律に窮して死ぬのなら、その津田康造の言うとおり、津田康造自身も自分自身を見つめて死なねばならぬのではないか。首猛夫は

それを指摘したのである。対して、津田康造は例によって落ち着いているが、虚を突かれたに違いない。「私は貴方に感心しますよ」と呟くのである。第二ラウンドは首猛夫がワンポイント返した、と言えよう。

ふたつめの可能性は一人狼に關してである。首猛夫が一人狼なら、「その肩には永遠の寂寥を負っているでしょうね」と津田康造は指摘するのだ。実際、首猛夫が他人の自同律に挑戦し続けて「人間精神の恐るべき変革」を達成してしまったなら、本人だけが変革から取り残されて孤独になりはしないか。いや、津田康造の着眼はもっと鋭い。「もし或るひとが、涯もない曠野を行く一匹の飢えおとろえた狼を見たら」と問いかけるのだ。そんな「或る人」など「その狼は容赦なく貪り食ってしまう」、と首猛夫は返す。しかし、津田康造はすぐまた問う。「もしそのひとが、狼の達し得ぬ高所において、ひたすら眺めおろしていたとしたら」貪り食うことは不可能ではないか。「高所」はすでに見た「より高いもの」と関連させて読むべきだろう。津田康造が言いたいのは、一人狼はありえない、ということだ。彼は第四章ではっきりそれを首猛夫に言っている、「貴方は自分で信じているような一人狼ではないのです

よ」。神、と言っているのか、少くともそれを感じさせるような何者かの目から逃れることはできず、孤独を許さない。そして、首猛夫もそうした存在を意識している。矢場徹吾との会話の際に「この薄暗い部屋の窓際に佇んでいる小さな二人の人物を凝つと見据えているような気がした」という、すでに触れた一節である。ちなみに、三輪与志の夢の「卑怯な振舞いをしてはならぬぞ」という声も「高所」からだ。

この問題をいまは追求せず、津田康造は「ところで」と話題を変えてしまう。首猛夫が計画の実現のために利用しようとしている人物が、もし「一人狼だったら、どうでしょう?」。その人物も首猛夫も一人狼なら、さきほどの鏡を見たような事態が起きるだろう。首猛夫はそれを意識した返答をする。この点で、私の言う可能性の「ひとつめ」と「ふたつめ」は重なってくる。しかし、もう少し、私は「高所」の人について付け加えておきたい。埴谷雄高は椎名麟三との対談で、「首猛夫という人物をどういうところで救いうるか疑問だが、ぼくは救いたいんだ」と述べている。<sup>(8)</sup>救いたい、と同時に、その難しさが伝わる発言である。難しいのは、首猛夫が黒川健吉を爆殺するからだろ

う。<sup>(9)</sup>ラスコーリニコフを救うのと同じ困難を、埴谷雄高は感じていたのではないか。「力強い悪徳」が津田康造と首猛夫の話題になる点も示唆的だ。そこで、首猛夫を救う契機として「高所」が用意された、と考えてみたくなる。その場合、「貴方は自分で信じているような一人狼ではないのですよ」という津田康造の一言は慰めとして解釈できるだろう。

# 注

- (1) 東典幸「埴谷雄高『死霊』第一章」(『大谷女子大国文』二〇〇六年三月)。
- (2) 日本放送出版協会、一九九七年七月。
- (3) (1) 参照。
- (4) (1) 参照。
- (5) (1) 参照。
- (6) 連想にすぎぬことを書きつけることになるが、これは蒲原有明「智慧の相者は我を見て」を思わせる。ほかにも、近代詩の名作や古典歌人の故事を想起させる例が埴谷雄高にはある。
- (7) この声は第七章の「違うぞー」までつながるかもしれない。
- (8) 『死霊』と『序章』をめぐって」(『総合文化』一九四六

年十一月)。

- (9) (1) 参照。また、第三章には、首猛夫が黒川健吉に対し、「いま君の眼の前に、既に点火されたダイナマイトとでもいったものが置かれて」云々と問い、不穏な「言質」を取る場面がある。

(本学日本語日本文学科教授)